



TITLE:

らうゝ れー『ミール』學說ノ研究 (三、完)

AUTHOR(S):

大塚, 金之助; 福田, 徳三

CITATION:

大塚, 金之助 ...[et al]. らうゝ れー『ミール』學說ノ研究(三、完). 經濟論叢 1916, 3(4): 589-597

ISSUE DATE:

1916-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127091>

RIGHT:

京都市帝國大學法學大叢論經濟

第 三 卷 第 四 號

故法學博士井上密君肖像并哀辭

論 說

對露輸出代金決済方法

國防稅ノ當否(二、完)

代表紙幣ト獨立紙幣(一)

課稅ト獨占價格(二)

戰後ノ人口増加政策(三)

保險本質論(二、完)

雜 錄

重子 在外正貨問題ナ河津博士ニ答フ

公營造物ニ關スル美濃部鐵田松本三博士ノ所論
ヲ讀ミテ東京市電車舊乘車券問題ニ及ブ(一)

支那ニ於人口過剩論ノ梗概

移民政策觀タル邦人同化問題

村落共產體ノ發達

らぐれー『ミール』學說ノ研究(三、完)

過去ニ於和蘭ノ植民の活動

神惟孝ノ事ニ鈴木券太郎氏ニ答フ

漬物机上觀

法學博士 戸田 海市

法學博士 神戶 正雄

法學士 作田 莊一

文學士 高田 保馬

法學士 米田 庄太郎

法學士 小島 昌太郎

法學博士 神戶 正雄

法學博士 福田 德三

法學博士 鈴木 券太郎

法學士 山本 美越乃

法學士 本庄 榮治郎

商學士 大塚 金之助

山本 美越乃

瀧本 誠一

法學士 財部 靜治

(載 轉 禁)

らぐれーミール學說ノ研究 (三、完)

大塚金之助

福田徳三校閱

第二欸 定期割替ノ近代の任

意・強制成立

任意成立説・強制成立説及其意義——両説共通ノ缺點——強制關係ノ發生ヲ誤ル——十六世紀以前ニ於ケル農民ノ隸屬關係——體僕制度ノ成立——両説共ニ全部ノ眞理ニ非ス——強制成立ノ場合——體僕制度存在セシ場合——體僕制度存在セサリシ場合——任意成立——四分一權占有ヨリ發達シタル場合——自由先占ヨリ發達シタル場合——比較ノ過失

予ハ前欸ニ於テらぐれーノ露西亞村落團體說ノ半面——村落團體共同所有ノ原始性——ニ就イテ少シク研究スル所アリシヲ以テ進シテ其ノ他ノ半面——定期割替ノ任意成立——ニ就イテ研究スル所アラントス。

共同所有ノ原始性ヲ主張スル者ト雖モ定期割替ノ近代の成立ヲ疑フ者ナシ、唯タらぐれーノ如ク任意成立ヲ唱フル者ト租税ノ共同擔保ニ依

ル強制成立ヲ唱フル者ト分ルルノミ。租税共同擔保說ハちちえりんニ始マル。此ノ說ニ據レハ農民ハ十六世紀ノ半葉ニ至ル迄自由且獨立ニ土地ヲ所有シテ之ヲ耕作シ、支拂フ可キ地代ヲ領主ト協約シ又其ノ屋敷地ノ賣却・相續・貸貸・遺贈ハ寸毫モ村落團體又ハ領主ノ干渉ヲ受クルコトナカリキ。耕地共有制度及ヒ定期割替ナク村落團體ハ其ノ團體員ニ對シテ何等ノ監督權ヲ行ハス。然レトモ農民ノ獨立ハ租税ト兵卒トヲ要スル國主ノ利益ニ反シ、又自己所有地ノ耕作ニ農民ノ助力ヲ要スル領主ノ利益ニモ反セルヲ以テふえおざる。いづのぶち帝ノ發布ニ係ル千五百九十二年ノ勅令ハ農民ヲ土地ニ拘束シタリ。即チ領主ハ名簿ヲ作成シテ其ノ所領ト看做サレタル土地ニ値スル農民ヲ登録シ農民ハ許可ナクシテ住所地ヲ變更スルコトヲ禁セラル。後ばりす・どごうのふノ發布セシ諸法令ニ依リテ體僕制度ノ確立ヲ見ルニ至リ、べてろ一世ノ時代ニ於テ人頭税及ヒ納税兵役ニ關スル村落團體ノ共同擔保ヲ定メタルノ結果、耕地ヲ分割シテ勞働

能力者ノ數ニ應シテ之ヲ配當スルノ制起ル、蓋シ之ニ依テ各人其ノ力ニ應シテ團體ノ負擔ヲ分擔スルヲ得セシメントシタルナリ。即チ租税共同擔保說ハらぐれーノ民主的學說ニ對極スル立法者意志說ナリ、詳言スレハ土地ノ定期割替ハ原始的の公共心又ハ自己否定ノ自動的方法又ハ社會契約說自由結合ニ依テ生シタルモノニ非サルコト、即チ *fraternité, égalité, liberté* ノ結果ニ非スシテ、強制關係ニ生セルモノナルコトヲ主張スルモノナリ。此ノ學說ハ二個ノ意義ヲ有ス、定期割替ノ近代の成立ヲ明カニシ且其ノ強制的の成立ニ因ル場合アルヲ確證シタルノ點是レニシテ、らぐれー說ノ一半ハ之ニ依テ起ツ能ハサルナリ。定期割替ノ近代の成立ヲ主張スルハ強制・任意ノ兩說共ニ正シ、然レトモ右兩說ハ又二個ノ共通ノ點ヲ有ス、其ハ即チ強制成立說カ強制ノ極端ニ走りタルカ如ク任意成立說カ任意自發ノ極端ニ走り共ニ定期割替制度ノ成立ヲ各地一律ニ説明セントシタルノ點及ヒ體僕度成立ノ時代ニ至ル迄農民カ身體ノ自由獨立ヲ

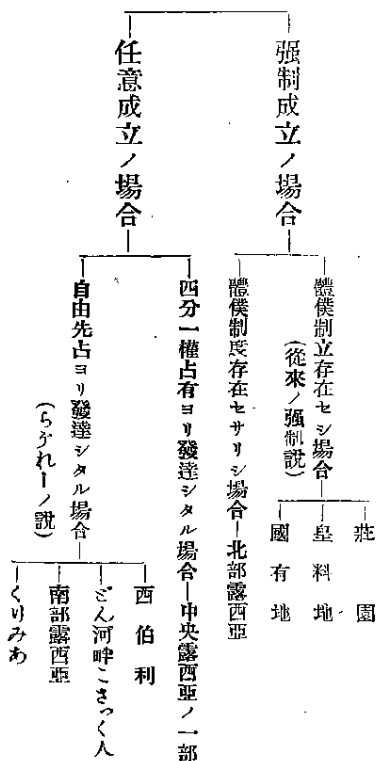
保有シタリトセルノ點是レナリ、即チ兩説ハ共ニ強制關係ノ起源ヲ誤リ且又定期割替ノ成立ニ關シ共ニ未タ一般原則タル能ハサルナリ。

農民カ十六世紀ニ至ル迄身體ノ自由ヲ保有シタリトスル説ハ既ニ舊説ニ屬ス、農民移動ノ自由カ一般的法律のニ禁止セラルル久シキ以前ヨリ農民カ事實上體僱關係ニ在リタルコトハこむれがすきー及ヒしむこびつちノ共ニ唱フル所ニシテあしれーモ亦タ夙ニ之ヲ認メタリ。もすかう國ニ於ケル十四世紀ノ農業政策ハ租税ノ主要源泉タル農民地即チ所謂黑色地カ租税ヲ負擔セサル特殊階級ノ所領ト變スルコトヲ恐レテ其ノ自由賣買ヲ禁シタリト雖モ、十五世紀ノもすかう政府ハ物質的給仕ヨリハ寧ロ其臣屬ノ忠勤ヲ要スルコト急ナリシヲ以テ、皇帝ハ其ノ臣屬ニ與フルニ農民地ヲ以テシ農民地ハ漸次莊園トナル。莊園ノ土地ハ之ヲ寺領・御料地・封地・世襲地ノ四ニ分ツ可ク各々其ノ住民ノ賦課税額ヲ異ニシ、寺領農民最モ負擔重シ。而シテ莊園農民ノ領主ニ對スル關係トシテ普クハレタルハ莊

園地ノ利用ニ對シ約定セル割合ヲ以テ土地收穫ノ一部ヲ支拂フ分益農關係ナリシカ、別ニ一部ハ生産物ヲ以テ一部ハ金錢ヲ以テおぶろくト稱スル契約地代ヲ支拂フおぶろく制度アリ、又寺領ハ別個ノ關係形式トシテ土地使用ノ對價トシテ耕作ス可キ土地面積ヲ以テ定メラルル條約ノ形式ニ於ケル小作アリ。此ノ如キ小作關係以外、事實上ニ於テ農民ハ領主ニ對シ小作人タルト同時ニ利子支拂ヲ要スル債務者タル資格ニ立チ、領主ノ小作人ニ對スル權力頗ル強大ニシテ、農民ハ債務ノ支拂ヲ完済スルニ非サレハ莊園ヲ離ルルコト能ハシ、僅カニ之カ辨濟ヲ爲ス領主アルトキ其ノ從屬關係ヲ移シ得タルノミ。農民移動ノ困難ヲ極メタルノ理由ハ單ニ之ニ止マラス、苛重ナル農民移住税ハ經濟上ヨリ農民移轉ノ自由ヲ失ヒ又法律ノ解約權ヲ剝奪シタリ。然レトモ國家ノ要求ト領主ノ要求トノ平行的増進甚タシキニ及ンテ農民ハ南東地方ニ逃亡スルヲ餘儀ナクセラレ、其ノ傳染的逃亡愈々甚シキニ至リテ徵税ノ便宜ヲ主眼トセル國家ハ漸

次農民移動ノ時及ヒ方法ヲ制限シ、千五百九十七年ヨリ千六百四十九年ニ至ル迄數度ノ改制ニ依リ、嘗テ隸屬ノ私法的性質ヲ帶ヒタルモノ茲ニ變シテ露西亞國法上ノ制度トシテノ體僕制度トナルニ至ル。即チ之ニ依テ彼ノ立法者意志說カ事實上ノ經濟的發達ヲ無視シ總テヲ立法ノ作用ニ歸セントスル極端ニ來リタルコトヲ知ルニ足ル可クられーガ強制關係ノ存在ヲ認ムルカ

如クニシテ尙ホ之ヲ明識セサルヲ足ラストスル所以明カナル可シ。
次ニ任意成立說及ヒ強制成立說共ニ未タ全部ノ眞理ニ非ス、蓋シ定期割替ヲ施行スルニ至リシ過程ハ各地其ノ事情ヲ異ニシ一様ニ之ヲ論スル能ハサルヲ以テナリ。今定期割替施行ノ過程ニ依リ各地ノ成立關係ヲ表示スレハ左ノ如シ。



以下順次右各項ヲ簡單ニ説明ス可シ。
強制成立ノ場合

一 體僕制度存在セシ場合
土地割替制度ノ成立ニ重大ナル關係ヲ有スルハ體僕制度ト人頭稅

ナリ。體僕制度ニ於テハ領主ハ増加セル勞働力ヲ平等ニ利用セントシテ占有者ナキ地ヲ新ニ分配シ又ハ餘地是レナキトキハ割替ヲ行フニ至ル可ク、人頭税ハ耕作農タルト土地ヲ有セサル官戸奴婢タルトヲ問ハス一樣ニ總テノ男子ニ課セラルルモノナルヲ以テ、領主ハ官戸奴婢ノ數ヲ減少シテ之ニ耕地ヲ班給スルニ至ル可キナリ。從テ舊もすから國ニ存在ヲ見サリシ定期班給制度ハ先ツ僧侶ノ私領ニ成立シ普ク莊園ニ行ハル。農地割當ノ自由處分ハ十六世紀既ニ中部露西亞ニ行ハレ、十八世紀ニ於テ政府ハ此ノ習俗ヲ國境地方ノ自由農民ニ及ボシ行ハントセリ。國有地ニ於ケル官農ノ間ニ於ケル過程モ之ニ類似シ、にこらす一世ハ千八百三十九年ヨリ千八百五十年ニ亘リ官農ノ約半數ニ強制シテ之ヲ行ハシメタリ。二 體僕制度存在セザリシ場合、既ニ述ヘタルカ如ク個人所有ノ發達セル北部露西亞ニ於テハ、千七百十九年人口調査所謂 Revision 施行セラレ、次テ千七百二十二年地租廢セラレテ新ニ人頭税賦課セラルルニ至レリ。

而シテ之カ支拂ノ爲メニハ農民各々土地ヲ有セサル可カラサルヲ以テ、國家ハ最高所有者タル資格ヲ以テ土地ノ平分ヲ行ハントシテ屬々訓示宣言ヲ發シ、貧民モ亦タ政府ノ農業政策ニ加ハツテ租稅給付能力ヲ獲ンコトヲカメタルモ、農民ノ分化ト經濟的弱者掠奪ノ過程ハ容易ニ止マズ、漸ク千八百二十九年ニ至リ大藏大臣布告ヲ以テ各村ニ土地ノ班給ヲ命シ、同三十年乃至三十一年富民ノ反對盛ナリシニ拘ハラス耕地割當均分ノコト強行セラルルニ至レリ。

任意成立ノ場合

一 四分一權占有ヨリ發達シタル場合、官農ノ半ハ尙ホ傳來ノ四分一權占有ヲ固執シタルカ、政府ハ之ニ對シテモ亦タ割替制度強制ノ農業政策ヲ樹立シ、富民ノ嚴罰其ノ他ノ過激手段ヲ採ツテ極力該制度ノ普及ヲ圖リタリト雖モ、政府ノ政策必スシモ成功ヲ齎ササリキ。然ルニ社會的關係ハ急激ニ進ミ、村落内ノ貧困者及ヒ無産者ハ固ク相團結シテ富民ニ對峙シ、多數ヲ恃ンテ之ヲ脅迫シ以テ直接ニ一般的平均方法ヲ強行

シ又ハ富民ヲシテ之ヲ斷行セシメタリ。又貧民ノ強制ナク富民自ラ意思シテ定期割替制度ヲ採用スルニ至ル場合アリ、其ノ一ハ租税ノ負擔過重ニシテ土地占有カ何等ノ經濟的價值ヲ有セサル場合、其ノ二ハ共同擔保ノ責任ニ因リ富民カ貧民ノ租税額ヲモ負擔セサル可カラサル場合ナリ。二 自由先占ヨリ發達シタル場合、自由先占ニ於テハ一方ニ先占權ヲ實現スル力ナキ者アルト同時ニ他方ニ廣大ナル面積ヲ耕作スル少數富民ヲ生シ其ノ對立ハ當然階級戰爭ヲ惹起スルニ至ル可シ。從テ租税ト租税負擔力ノ不均衡増大シ土地ノ稀少性増加シ貧民ノ勢力富民ヲ凌駕スルニ至リ新所有權形式ト新利用法トノ移入施行セラルルハ勢ノ當然ナリ。今耕地ニ就イテ之ヲ見ルニ、耕地カ新制度ニ進ム第一歩ハ自由先占カ制約的先占ト變スルコトニシテ、現ニ利用ヲ行ハサル先占地ニ對スル權利ハ之ニ依テ著シク制限セラル可シ。凡ソ繼續的先占ハ第一先占原則ニ基ク先占ト耕作勞働トノ二ヲ以テ其ノ要素トスト雖モ先占ヲ行ツテヨリ耕作ニ着手スル

迄ニハ長キ時期ヲ費スコトアリ。土地ノ不足ハ此ノ如キ利用セラレサル先占地即チ處女地及ヒ長期休閒地ヲ再ヒ先占ノ目的タラシメサレハ止マス、茲ニ於テ勞働ヲ加ヘスシテ先占ヲ繼續スルコトヲ許サルル期間ハ二十年乃至十五年ヨリ三年ニ短縮セラレ、新(制約的)先占形式ニ於テハ事實耕作ヲ繼續スル限リニ於テノミ先占權ヲ享有シ得ルコトトナリ、一人ノ土地ハ其ノ勞働ヲ離レタル瞬間他人之ヲ先占シ得可ク、一人ノ先占地ノ中央ニ於テスラ休閒地存セハ他人之ヲ先占シ得ルニ至ル、是レ可耕地ノ比較的減少テウ土地所有權發達ノ經濟的條件稍備ハレルコトヲ示スモノナリト雖モ、土地ニ對スル權利ハ尙ホ勞働ニ結付ケラレ未タ勞働ヨリ分離獨立セル權利ヲ生セサルノ時期ニ屬スルモノトス。此ノ如ク勞働力ヲ基礎トスル先占ハ反ツテ貧民ノ土地ヲ掠奪セシムル社會上ノ弊害ト地方休養ノ餘裕ヲ土地ニ具フル能ハサル農業上ノ弊害トヲ生シタルヲ以テ是レ又長ク維持スル能ハス、即チ村落團體ハ徐ニ其ノ處分權ヲ擴張シ、階級戰爭

ハ無産者ノ勝利ニ歸シテ境界整理漸ク頻繁ニ行ハルルニ至リ、極端ナル土地過剩ト土地缺乏トハ其ノ調和ヲ見、次テ一般ノ平均法ニ依リ男子ノ數ヲ標準トシテ各家族ノ耕地ハ比較ノ平均セラレタリ。之ニ類似ノ過程ハ時ヲ異ニシテ秣地・林地・牧地・屋敷地ニ就イテモ亦タ行ハレタリ、自由先占ヨリ發達シ來レル定期班給制度ハどん河畔ノこさつく人間ニ存在シくりみあ及ヒ南部露西亞ニモ亦タ其ノ存在ヲ認ム可ク、其ノ發達ノ經路全然西伯利ニ於ケルト同シ。此等地方ニ於ケル割替制度ノ成立ハ強制的性質ヲ帶ブルコトナク純然タル經濟の成立ヲ示シ、一方ニ於テ勞動ハ抑制の原因トシテ割替ヲ遅クシ又ハ割替期間ヲ延長シ、他方ニ於テ人口ノ増殖從テ生スル土地ノ稀少性ハ促進の因由ト成ツテ平均の傾向ヲ助長シ、其ノ制度成立ノ過程全ク前項説明ノ場合ト異ナル。

以上任意・強制兩成立ノ場合ヲ説明シタリ。予ハ西伯利ノ任意成立ヲ觀テ立法者意思說ヲ否定セントスル態度モ、又西伯利ノ任意自由ノ成

立ハ土地廣大ニシテ自由先占地豐富ナリシカ爲メ政府ノ意思ヲ以テシテモ容易ニ社會的經濟的過程ヲ動カス能ハサリシニ因ルノミトスル態度モ共ニ公平ナルモノニ非スト信ス、蓋シ前者ハ定期割替ノ施行カ多ク租税ノ負擔ト關聯セル事實ヲ無視シ、後者ハ各地所有關係ノ相違ヲ眼中ニ置カサルヲ以テナリ。らぐれーガ最近迄行ハレ居タル本制度成立ノ過程ヲ見テ體僕制度時代ニ於ケル其ノ成立ヲモ任意成立ニ歸シタルハ、類推ノ途ヲ誤リめいんノ所謂比較ノ過失ヲ犯シ比較研究ノ最モ危險ナル一面ヲ暴露セルモノニシテ、しむこがつちガ體僕制度ノ研究ヨリ出發シテ最近時ノ任意成立ヲ以テ強制ノ原則ノ例外ト看做シタルト選フ所ナシ。

第三節 結 論

氏族共有說ニ對スル最後ノ疑問——結論

予ハ第二節第一款ニ於テ共同所有存在セシヤ共同所有存在セシモノトシテ其カ定期割替ヲ慣行スル耕地共有制度ト關聯ヲ有スルモノナリヤノ二個ノ問題ヲ解キ、同第二款ニ於テ定期割替

ノ近代の成立ヲ共ニ等シク認ムル任意説及ヒ強
制説ヲ拉シ來リ、而説共ニ未タ全部ノ稟理ニ非
サル旨ヲ解明シタリ。然レトモ予ノ所説ハ尙ホ
定期割替ノ成立及ヒ其ノ成立以前ニノミ關スル
ニ過キスシテ、未タ定期割替施行後ノ問題ニハ
毫毛觸ルル所ナカリキ。耕地共有制度ノ最モ廣
ク行ハレタル大露西亞ニ於テモ土地ノ全部カ悉
ク村落團體ノ共同所有ニ屬スルモノニ非スシ
テ、皇族御料地・貴族所領ノ存在スルコトヲ説ク
ラゲレノ態度ハ、原始共有ヲ主張スルべれい
エゲカ個人所有ノ共存ヲ承認スルニ髣髴タリ。
然ラハ個人所有ノ行ハレサル處ニ於テハ土地ハ
村落團體ノ共同所有ナリトスルラゲレノ學説
ニ疑問ノ餘地是レナキカ。ラゲレハ露西亞村
落團體カ國民ノ基本的成分タル一個ノ法人ナル
コトヲ説キ、其ノ所有單位トシテノ重要ヲ述ヘ
テ、『此ノ團體ハ即チ土地ノ唯一ノ所有者ニシテ
各個人ハ之ニ對シ單ニ一時的用益權ヲ享有スル
ニ過キス』(譯補書八頁)トセリ。然ルニラゲレハ
他面ニ於テ村落土地共有制度ヲ以テ氏族共有制

度ナリトシ、(譯補書四頁)又幾多村落ノ結合シテ成
レル『ぢろすと』ナル村落組合ノ人口ヲ三百乃至
二千ト認定セリ。(譯補書九頁)一村ノ人口極メテ
少キヲ知ルニ足ル。(原書九頁)茲ニ於テ村落團體ノ共同所
有ハ氏族共同所有ト看做ス可キモノナリヤ否ヤ
ノ疑ヲ生ス可ク、ふゆすてゐる。ど・く・らんじい
ハ村落人口ヲ二百人トシ村落共有ハ氏族共有ニ
非サルコトヲ攻ムルニ至レリ。(あしゅれー譯書一〇
八—九〇頁)又ラゲレ自ラ村落團體カ寧ロ家族
ノ擴張ニ近キニ非サルヤヲ仄メカシ、
Die Gemeinde ist nicht lediglich eine Verwaltungsein-
heit. Sie ist vielmehr eine patriarchale Genossenschaft,
eine Erweiterung der Familie, deren Bande so innige,
deren Solidarität eine so enge ist, dass ein Fremder
nicht ohne die Einwilligung der Mehrheit in dieselbe
aufgenommen werden kann.
「村落團體ハ唯一ノ個ノ行政單位タルニ止マラス、寧ロ父權的
團體ナリ、即チ家族ノ擴張ナリ、其ノ結合極メテ密接ニシテ
其ノ共同擔保ノ極メテ強固ナルコトハ、其ノ過半数ノ承諾ナ
ケレハ外來者ハ村落團體内ニ入ル能ハサル爲ナリ。」(譯補書一
二頁原書一一—一二頁)
又更ニ父權の家族ヲ以テ村落團體ノ血縁の基礎

ト看做シ、『みゐる』ノ共有制度ヲ維持シタル所以ノ兄弟分の慣習・特殊利益ノ拋棄・共產的思想等ハ主トシテ此ノ家族團體内ニ發達スルモノナルヲ以テ、父權の家族ノ分裂ハ恐ラクハ之ニ續イテ村落團體ノ消滅ヲ惹キ起スモノナル可シトスルニ至ツテハ、此ノ攻撃ノ必スモのナキニ放テル矢ニ非サルヲ思フ。況ンヤ最近ノ研究力近世ノ村落團體ト氏族制度トノ何等共通スル所ナキヲ立證確認セルニ於テハ、露西亞村落ノ共同所有ハらぐれーカ建テタル所有權發展階級ノ法則ニ合致セサルニ至ラサルヤ。

之ヲ要言スルニ、らぐれーカ經濟進化ノ問題ト所有權發達ノ問題トヲ相即不離タラシメタルハ其ノ學說ノ著シキ特色ナリ。然レトモ其ハ一面ニ於テ反ツテ極端ナル一般化ヲ行ハシムルニ至リシニ非サルヤヲ危マシム。又其ノ露西亞村落團體ニ關スル學說ノ前半ハ共同所有ノ連次の發展ノ證明不可能ナルコトニ依テ破レ、後半ニ至ツテ定期割替ノ近代の成立ヲ主張スルハ正シト雖モ其ノ成立ノ因由ヲ任意ニ歸シタル點ハ尙

ホ多少ノ誤謬ヲ含ム。加之『みゐる』ノ氏族ナリヤ否ヤノ疑問セララルニ至ラハ『みゐる』ノ發達ハ所謂一般の發展階級ノ法則ニ副ハス、遂ニハ經濟進化ト所有權ノ發達トカ階級の平行のニ進ムモノニ非ステウ矛盾ヲ生スルニ至ルナキヲ保セス。是レらぐれーノ學說ノ檢察ト事實ノ研究ニ依テ生スル予ノ貧シキ結論ナリ。(畢)

右一篇ハ大塚氏が予ノ研究室ニ於テ私有財産制度ノ發展ニ關シテ研究セラレタルモノノ一部ニシテ國民經濟雜誌掲載ノ「めーん印度村落團體說評論」ト關連スルモノナリ。予ハ全篇ヲ熟讀シテ校訂ヲ施シ茲ニ本誌ニ收載ナセフニ方リ公ケニ校園ノ責任ヲ負フモノナリ(福田徳三識)